



鶴岡市櫛引地域出身の大相撲の元横綱・柏戸（本名富樫剛）が58歳の若さで亡くなって、24年がたった。「おらが国さの横綱」に庄内地方が熱狂した時代も風化してきたが、故郷の家族、同級生ら関係者は今も思い出を語っている。人生はその時々のかっかけ、出会いがその後を左右、柏戸もその都度、運命に導かれるように相撲人生を歩んだ。その出会い、巡り合わせを「柏戸の真実」と題してたどる。

姉喜久子が生きていたら(上)

7歳で弟の子守り

世界を恐怖に陥れた新型コロナウイルスのワクチンは1年後に出来る見通しという。人類は感染症、不治の病などが起きるたびに特效薬を作り、病気に対抗してきた。あの薬があれば助かっただろうに、という命が、柏戸のきょうだいにあった。昭和25（1955



0)年、19歳の若さで亡くなった次姉・喜久子だ。柏戸は7人きょうだい。旧山添村桂荒俣集落で生ま

学校ごっここの先生

日本は20年終戦を迎えた。国内は原爆を二度落とされ、戦争に負けた徒労感は大きなものがあったが、平和が戻って、安んじた気分もある。父元雄、母かつる。田んぼ2町歩、果樹が1町歩の自作農だった。喜久子は上から2番目の次女で剛は4番目の次男だった。剛が誕生した時、喜久子はまだ7歳だったが、山形の昔の農村が舞台だったテレビドラマ「おしん」で思い出されるように、小さな体で赤ちゃんをおんぶして、おむつも取りかえるなど子守りをした。きょうだいが多い家では姉たちの当たり前の手伝いだった。

戦時中から喜久子は近所の子どもたちも含め、よく世話をした。特に学校ごっこが好きで、庭にミカンを箱を出しては机にして先生役となり問題を出したり、「体育」の時間と称して、ちびっ子たちに家の周りを駆け回らせたりした。4歳下の長男・勝(84)は「それでも、言葉は少なく、物静かだった。同じようなタイプと見たのだから。剛のことを小さい頃から、かわいがっていた」という。「姉がそのまま元氣だったら、堅実な人生を願い、大相撲に入門することに反対し、その言葉に従ったはず」と言うように、剛は綱を張った力士だが、根は素朴で闘志むきだしとは無縁のタイプだった。

長姉は良縁恵まれ

13年生まれの子は小さい頃から同級生から頭ごつぱらだった。姉喜久子は物静かなタイプだった。

けるほど長身で、肩幅もがっちりしていたが、おとなしかった。父が心臓に疾患を抱えていたこともあって、目いっぱい力仕事が出来ず、男きょうだい2人は小さいころから農作業に駆り出された。

長姉・文子は終戦直後、鶴岡裁縫学校(その後鶴岡家政高、現鶴岡中央高)を卒業後、郵便局に勤め、縁があつて東北管林局に勤めていた秋田市出身の男性と結婚、家を出た。

嫁に行った長女の代わり

に喜久子は高等科2年(現中学2年)修了で弟たちとともに農作業、家事を手伝いながら、下のきょうだいたちの面倒を見た。休みの日には鶴岡に出て、映画を見るのが楽しみ。筆まめで映画の批評を細かく記して、友達と見せ合っていた。

19歳で隣村へ嫁入り

富樫家では16年には三男・威が誕生、19年に四男・志朗が生まれ、終戦後の23



記念館前の柏戸像。故郷を愛した横綱だった

年には7番目の末っ子で三女の愛子が誕生した。

両親は次女の将来を気に始めた。戦地から若い男性たちも大分戻ってきた。長女は良縁に恵まれ、次女もいずれば嫁に行く身である。良い話があればいつでもという気持ちがあった。親から見ても、黙々と働く上に気立ての良い娘。嫁に行ったら、確実に認められて、夫にも愛されるだろうとの思いがあった。

周囲に勧められるまま、山添村の隣村で旧鶴岡市郊外の農家に嫁入ることになった。4月3日だった。「じいちゃん、ばあちゃん、元氣でね」当時祖母父母もまだ若く、三代同居だった。弟、親戚らにリヤカー3台の嫁入り道具を託し、両親に伴われ、車で喜久子は出発した。それが後に暗転した。

|| 敬称略 ||
(富樫 嘉美)